

96 富士川流域における断層系の解析

角田史雄(埼玉大学・教養)

富士川最上流域の巨摩山地およびその南方の身延山地・天子山地においては、断層線の伸びの方向から、3つのちがった特徴をもつ断層系が発達する。すなわち、N-S方向の走向をもち、玢岩を伴うA断層系、NE-SW方向とNW-SE方向の2つの断層群の組合わせが主体のB断層系、N-S方向の走向で高角逆断層を主体とするC断層系の3つの断層系である。

A断層系を構成する断層は、長さ2~6km、垂直のものが卓越し、その分布は御勅使川、巨摩山地東縁部、天子山脈、身延山南部などに限られる。B断層系に属する断層の多くは、落差数100m、垂直、長さ2kmの規模で、ほぼ全域的に発達する。C断層系の断層は、長さ10km以上、落差(層序差)1000m以上で、巨摩山地および身延山地の東縁にのみ発達する。

B断層系はA断層系を転位させ、C断層系はA断層系・B断層系を転位させている。

A断層系は復元されるいくつかの堆積盆の長軸・短軸のすべてに斜交し、B断層系に属する断層はこれらの軸とほぼ平行である。C断層系はB断層系の2系統の断層の方向に規制されながらも、N-S性の走向を保つ。

以上のようなことから、堆積盆(堆積の中心)の移動をもたらす運動とそれ以降の断層運動との関係を述べる。